

妹いもうと

「お姉ちゃんなんだから、がまんしなさい。」

まい日まい日、がまんする。妹のために、がまんする。楽しみにしていたおやつも、お気に入りの人形も、妹のためにがまんする。わたしは、妹がうらやましい。

夏休み、妹が高ねつを出した。その日は、お父さんといとこたちと、あそびにでかけるやくそくをしていた。

「あたまがいたい。いたい。」

ねこむ妹を置いて、わたしはお父さんと、出かけることにした。つらそうにねている妹を、おいて出かけるのはかわいそうだけど、お父さんとあそびに出かけたい気持ちの方が大きかった。

妹がいない時間、わたしはお父さんをひとりじめできた。妹がいないと、

「お姉ちゃんなんだからがまんしなさい。」

と、言われぬ。おいしいおやつも、人形も本も、全部わたしのもの。お父さんのだっこも、わたしだけのもの。わたしはうれしくて、うれしくて、家で待つ妹のことを、すっかりわすれていた。楽しくて、楽しくて、はしゃいで帰ると、妹が泣いて待っていた。

「あたまがいたくて泣いているの？」

わたしが聞いても、妹は何もこたえなかった。

何日かして、わたしも高ねつが出た。あたまがいたく、体もだるかった。妹はすっかり元気になっていった。

「どこか出かけるか？」

お父さんが妹に聞いた。わたしは、かなしくなった。お父さんとあそびに出かける妹が、うらやましかつたから。あたまはわれそうにいたいし、あそびに出かける妹がうらやましいし、わたしはかなしくて、かなしくて、泣きそうだった。ひっしで泣くのをごまんしていると、

「行かない！ お姉ちゃんといる！」

妹の言葉に、わたしはおどろいた。わたしがお父さんとあそんでいた時、妹はどんな気持ちだっただろう。泣きながら待っていた妹。あの時、びょう気の妹を一ばんに思っであげられなかったことが、かなしくなった。

「お姉ちゃん、いつもありがとう。はやくげんきになってね。」

妹が、ならいたての下手な文字で書いた手紙と、お気に入りの人形を、まくら元にならべてくれた。

「ありがとう。」

「いつもありがとう、お姉ちゃん。」

がまん、がまんはいやだけど、もう少しだけ、妹が小学生になるまでは、妹のためにがまんしよう。だってわたしは、妹が大すきだから。

#### 評価のポイント

妹の二言から姉への思いが伝わってくる。作者の心の成長がえがけている。